

千代中の 居座之器

《学校だより》 第 5 号

令和 7 年 9 月 16 日発行

小田原市立千代中学校

校長 中村 栄江

学校に子どもたちが戻ってきました

夏休みが明け、通常の学校生活が再スタートしました。笑顔で登校してくる子どもたちの様子から、ご家庭や地域でたくさんの貴重な時間を過ごせたことがうかがえます。年々暑くなり、いつまでも秋らしくならずに居座る夏。熱中症対策は、もう少し続きそうです。



千代中の防災教育

9 月 1 日は「防災の日」。今から 102 年前の大正 12 年(1923 年)の関東大震災の発災に由来します。千代中学校の校舎も全壊しましたが、半日日課で生徒が下校していたため、けが等はなかったとの記録があります。また、先日の台風 15 号の接近・通過に伴う大雨警報、土砂災害警戒情報、7 月末のカムチャツカ半島沖地震による津波警報と、災害に対して日頃の備えを考える機会がたくさんありました。

災害は、過去の教訓から学ぶことが多く、東日本大震災では街に残された碑文や言い伝えにより命を救われた方がいらっしゃいました。とっさの時に命を守るために適切な判断をし、最善の行動がとれるよう、日ごろの訓練は大切です。

○千代中では年間 5 回の訓練を実施

時 期	訓 練	訓練の内容・目的
5 月初	引き取り訓練	・震度 5 弱以上の地震発生を想定 ・校内の危険な場所等を認識し、グラウンド避難を想定する ・教室待機し、保護者引き取り(引き取りカードの運用)の実施
5 月中	シェイクアウト訓練 	・震度 4 程度のやや大きい地震を想定 ・とっさに素早く身を低くし頭を守る行動がとれるようにする - 教室にいた場合は机の下にもぐる - 廊下にいた場合は窓から離れる - 階段にいた場合は手すりなどにつかまり落下防止 - グラウンドにいた場合は校舎から離れ中央に集まる
9 月	防災訓練	・校舎内で火災発生したことを想定 ・校舎配置図をもとに、発火場所を避けた避難経路を考える
10 月	シェイクアウト訓練	・5 月実施の訓練が身についているか再確認する
12 月	防災訓練	※R6 までは津波を想定した上階避難訓練を実施 - ハザードマップの見取りから津波の危険性が極めて低いことや、防災アドバイザーの進言により、今年度から通常避難訓練とする

9月5日（金）火災を想定した図上防災訓練を実施予定でしたが…

→今月中に実施予定です

残念ながら、台風接近・通過に伴う休校で延期となりました。今月中の実施を検討中です。

ベルが鳴って災害発生を知り、教員の指示のもと静かに素早く避難する。これが一般的な訓練の流れですが、今回は、実際の避難はせず、教室配置図を見て災害時の学校の危険個所を考え、教室や特別教室で授業を受けていた場合の避難経路を自分たちで考える訓練を行います。

教員の指示がなくても、自分たちで命を守るための最善の行動が取れるようになることを目標としています。

災害時には、地域の中で中学生は、即戦力としての活躍が期待されています。自助・共助・公助の連携の輪を広げて地域の防災力を高めたいと思います。

3年「下水道 出前授業」実施

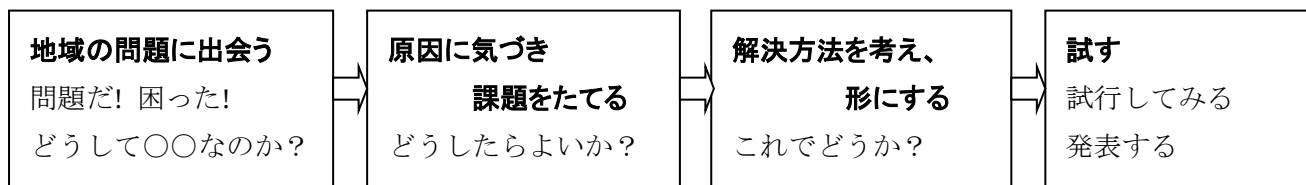
小田原下水道サービス、管清工業株式会社のご協力により、保健体育科保健分野の、下水道について授業を行っていただきました。下水とは汚水と雨水の両方を指すこと。日本一大きい下水道の直径は10メートル40センチもあること。水再生センターでは、下水をきれいにする仕組みが整っていて、ごみを取り除いた後に、微生物によって浄化すること、下水道のメンテナンスは、ロボットを使って行うことなど、知らないことがたくさんありました。



また、ティッシュペーパーとトイレトペーパーの水への溶け方の違いを実験により明らかにしました。水道管を長く使うためには、油、髪の毛、食べ残し、ティッシュペーパーを流してはいけないことも理解できました。各地で豪雨が発生する昨今、下水道が果たす役割は大きく、防災意識の向上にもつながる内容でした。

千代中の STEAM 教育

小田原市では、よりよい社会を創る力（「社会力」）の育成をめざし、地域に実在する諸問題に対し、各教科で学んだことを統合的に働かせながら、探究的・創造的に解決をめざす「小田原版 STEAM 教育」に取り組んでいます。



千代中では、米作りと地域の特産物である梅に着目し、総合的な学習の時間で「地域農業の課題・解決」をテーマに学習を進めています。

【1学年】10月に地域で長年米作りに従事する方を講師にお招きし、米作りの困りごとなどを話していただきます。6月の田植え、7月のひえ取り、10月の稲刈りと一連の作業の体験を踏まえ、課題とその解決方法を探ります。

【3学年】10月に梅づくりを手掛ける方にお話しいただきます。梅林写生会を実施し、身近に感じてきた梅について、観光、栽培、販売と広い視野で現状をさぐり、課題をとらえます。